

第3回レインボープラン評価検討委員会

会 議 録

日時：令和3年6月11日15時15分～17時25分

会場：市役所2階市民防災研修室

1. 開 会

2. 委員長あいさつ

前回会議では様々のご意見をいただき感謝。本日の前半は三浦先生による研修を頂き、それを受けて後半はワークショップということで今回も様々なアイディアが出されることを期待している。よろしくお願いいたします。

3. 研修 【東北芸術工科大学 三浦秀一教授】

■環境分野におけるSDGsについて

■鶴岡市三瀬自治会の取り組みについて

今後のレインボープランの方向性を検討するうえで指標となる講話を頂いた。
(以下、部分的に抜粋)

【長井市とのつながりとSDGs】

長井市とのつながりは2000年、豊田小学校はじめ市内の全小学校で省エネ共和国の取り組みを行った。校長先生が大統領になって、全児童が環境・省エネ学習に取り組んだことが始まり。小学校の電気量がどれくらい減っているかわかるように機械を設置し、見える化したことで、自分たちで無駄な電気を消すようになった。一番効果が出たのが豊田小学校だった。自分たちの取り組みがCO₂を減らすことが目に見えて分かるので、家庭にも持ち帰って設置したりした。

2003年には、長井出身のゼミ生が、菜の花から搾った油を燃料にフラワー長井線を動かすという実験をした。

そして、このレインボープラン。

行政からではなく、市民のリードで地域循環の理念を構築した。市民参加のまちづくりをしてきたことが成功のカギとなった。これは今に通じる重要な成果。

それから20年が経ち、環境の中での世界の動きというものが大きく変わって、地方でも過疎化の流れがありこの20年で社会が大きく変動した。いろんな活動が変わってくるのは自然の流れであり、原点に立ち返って考えることは大事なことです。

今後、ごみ問題や世界的なSDGsの流れにどのように向き合っていくか。

20年前は環境と経済は対立していたが、今は統合的に考えられる。環境への取り組みに

対して市民、行政、企業が一緒に参加する。経済につながる企業、大都市との結びつきも重要である。

レインボープランは地域内の循環の中でやってきたが、大きい循環と小さい循環、都市部とのつながり、まちとむら、中心部と周辺部、様々な循環の形があってよい。

SDGs は持続可能な社会を目指す 17 の目標。

レインボープランの中核となるのが食料と農業であり、目標 2 の“飢餓をゼロに”や目標 12 の“つくる責任、つかう責任”に結びつく。他にも、目標 11 の“住み続けられるまちづくりを”目標 13 の“気候変動に具体的な対策を”などがあるが、日本の問題、世界の問題など様々な問題を一緒に考えていくことが大事であり、これが SDGs の考え方の一つになっている。

【鶴岡市 三瀬自治会の取り組み】

鶴岡市三瀬地区は、人口 1300 人、400 世帯余りの海と山に囲まれた集落。山があり川があり谷筋に田んぼがあって海までつながっているという分かりやすい中山間地。2011 年の東日本大震災を契機にエネルギーに対する危機意識が芽生えたのが始まり。自治会長、コミセンの事務局長を中心にエネルギーの勉強会、様々な学習会を行った。

三瀬といえば三瀬杉が有名だが、ちょうどその頃、昔、みんなで植えた木が大きくなり山が荒れ始めていた。この山の木が、エネルギーや環境保全のために使われ、さらに経済的な価値をもたらすのではないかということで、自治会のプロジェクトへと繋がった。三瀬自治会の強みは、国の補助金を取りに行ける若者がいたこと。U ターンしてきた当時 30 歳過ぎのコミセン事務局長が自治会として補助金取りまで行った。

人口減少や防災など、地域課題の中のひとつに環境やエネルギーが加わり、地域の人たちが課題解決のために一緒に考えていく。これは SDGs の考え方にも近いが、環境問題、人口減少問題、と切り離すのではなく同時並行で考えていく。

自治会では、コミセンや保育園に薪ストーブを入れよう、高齢者は森に行って健康になろう、と自分たちで発信すると同時に、森づくりにも取り組んだ。

三瀬の住民たちは、年間一億円の石油を他から買って使っていたが、森の中からそのエネルギーを生み出せるポテンシャルがあることがわかった。一億円の石油がこの森で賄えるとわかれば、取り組みへの力の入り方が変わってくる。この地域の雇用を生み出したり、経済を少しでも立て直すためにと皆スイッチが入った。薪を作るだけでなく間伐を積極的に計画的にやる。2030 年までの伐採計画が立っている。

地域の中の循環、都市との連携、企業とのパートナーシップによって薪が出やすくなり、経済的な循環が生まれる。いろんな技術を使えばいろんなモデルが作れる。

4. ワークショップ（提言書の作成に向けた具体的な方向性の検討）

テーマ ～継承すべきものを明確にして、象徴的なものとして取り組むためには～

消費者グループ（ファシリテーター下平教授）と農業者グループ（ファシリテーター三浦

教授)に分かれ、「レインボープランの引き継ぐべきもの、大切にすべきものについて、具体的にどのようなところか」についてワークショップを行った。

各グループの代表がまとめて発表

Aグループ（消費、教育関係者）

委員 L：グループ内で出された意見を、SDGs の観点から 4 つにまとめグループ分けを行った。目標 4 の“質の高い教育をみんなに”では、子どもたちの学習素材として教育的価値を引継ぎ、子どもたちが共感し体現できることや、楽しく取り組める工夫、人と人（目標）がつながることが必要であり、食育として、学校給食だけでなく保育園、幼稚園にもレインボー認証米を使うことで、循環型農業の魅力をアピールすることが大切との意見が出た。目標 11 の“住み続けられるまちづくりを”では、行政の仕事に収支のバランスは必要か、との意見が出た。次に目標 12 の“つくる責任つかう責任”では、食品ロスの削減を前提とし、生ごみ以外にもプラスチックごみのリサイクルの促進、健康でおいしい安全な野菜をとおして農家と消費者のつながり、生ごみがおいしい野菜となって台所へ戻ってくる循環は引き継ぐべきとの意見が出た。最後に目標 17 の“パートナーシップで目標を達成しよう”では、世界の動向（ニューヨーク市の取り組みなど）に目を向けながら、市民一人ひとりが自分事として向き合えるやり方を考えていく、中央地区以外の人も参加できる仕組みづくりという意見が出た。

Bグループ（農業関係者）

委員 M：農業をやっている者として話をした後、それぞれが書き出し、大きく 7 つのグループ分けができた。まず“経済と環境”の視点では、都市との地方のつながり、循環、都市型の流通の方が環境や質を考えている、小規模農家を評価するバイヤーがいるといった意見が出た。“循環”の括りでは、生産者と消費者の間の循環、地域循環、グローバル化、域内循環はマーケットが小さい、域外商品の創出と域内循環の両立といった意見が出た。“これまでのつながり”という観点では、今まで視察に来られた方とのつながりも大切にするとの意見が出た。“堆肥”の括りでは、コンポストを含めた土づくり、畜産堆肥など域内資源の活用、“理念”では、人の輪、土の輪、有機の輪、市民参加、環境の追求、生ごみを出す人の思いをつなぐという意見が出た。“食の安全”では、長井産の安全な農産物、安全性を担保、環境への意識づけが大切、“家庭菜園”の括りでは、農的暮らしのサポートが大切であるとの意見が出た。

5. 協議

（委員一人ずつ本日の感想やこれまでの委員会を通しての感想を発言）

委員 L：今回も新たに学んだことがたくさんあった。自分が普段考えている以上のことを考えられたり、確認できたりする貴重な機会だった。

委員 N：以前から SDGs という言葉はよく聞いていたが、今日のワークショップで皆さんの意見を通して、“そんな風にまとめられるんだ”ということを学ぶことができた。

委員 O: リアルに農業で生計を立てている方々の話を聞いて、家庭菜園で自給用に野菜を作っているのとは全く違う考え方を聞いて良かった。一方で、レインボープランは元々市民が参加しての域内循環、レインボー堆肥で育てた野菜を市民に届けるという理念から始まったわけだが、都市の生活者の方が安心安全への意識が高いという現実があるという話を聞いて、そのニーズを満たす作物を作っていくことと、レインボーの域内循環を何とか両立させられないかという思いがあるが、非常に難しいとも感じた。自分自身でも今後も考えてみたいと思った。

委員 P: 委員 M のような若い農業者の考えを聞いて、なるほどと思ったことがたくさんあった。レインボーに限らず、農林課には是非、若い農業者たちに集まってもらい、意見を出し合える場を作ってもらいたい。これからの農業を考えたときに、必ず必要なものが出てくる。以前、西根で基盤整備が始まったときに、若い人や女性の方、農業をしていない人にも集まってもらってワークショップをしたことがあった。そのときに意見がたくさん出て、夢があってもおもしろいなと思った。実現するかどうかは別だが、いろいろな考え方が出て非常に勉強になったので、ぜひともやってもらいたい。

委員 M: (ワークショップでは) 現役世代として、理念とかではなく、現実的に話をさせてもらった。農業にもいろんな課題があって、よく後継者問題の話がでるが、簡単なことは、三浦先生の話にもあったが、経済といかに結び付くか。後継者が欲しかったらいかに儲けるか。儲ければ(後継者は)勝手についてくると思うし、いかに回していくかが大事。考え方が立派なのはいいが、それに対していかに利益を上げられるか。そこを追求しなかったら誰もついてこないと思う。その二つ(環境と経済)を見極めた政策をぜひやってもらいたい。

委員 Q: 数年前に、毎日新聞にニューヨーク市で生ごみを収集して堆肥を作るリサイクルを始めたという記事が大きく載っていた。それが前提にあって、最近“マイクロプラスチックストーリー”というドキュメンタリー映画を見た。ニューヨークの小学5年生が、マイクロプラスチック汚染に疑問を抱き、自分たちの未来を何とかしようとして立ち上がったのが2011年。最初は身近な給食のプラスチック食器を土に戻るもので代用しようというところから始まり、それがニューヨーク市長を動かした。そして2013年に市長はプラスチックゼロ宣言をした。子どもたちは、自分たちが残した食品残渣もゴミになるよね、じゃあ残さないようにしよう。どうしても残ったものは捨てるものじゃない、堆肥になるよね、と。それが生ごみのリサイクルに繋がったわけです。これは、生ごみだけの問題ではなくて、紙だったりプラスチックだったり、衣類だったり、大きな社会全体の環境問題だと思う。システム全体の問題、SDGs12番のつくる責任、つかう責任、そこにレインボープランは合致しているなあと。生ごみリサイクルは長井の人がこれまで脈々と受け継いできたものをここでやめる方向に舵をきるのかと。長井市民の心意気というか、生き様というか、子供たちに残すべき社会というか、そういうものを大人が示さなきゃいけないと改めて思った。

委員 R: 今、このコロナ禍で、子どもたちがお家の方と外食をしなくなって、家でご飯を作ったり、手伝いをするようになって、非常に良いチャンスだなと思っている。レインボ

ープランの引き継ぐべきもの、価値というのは、ここにいらっしゃる委員の方は重々承知だと思うが、先ほどのワークショップの中で、(SDGs17 番の) パートナリーシップで（目標を達成しよう）というものがあったが、生産者、消費者など立場はそれぞれ違うが、みんなでそれを知る、他人ごとにせずみんながそれを知り、広めていくことが大事だと思う。

委員 S：ワークショップで委員 M の話を初めて聞いて、知らなかったことを知れるというのはすごく楽しいなと思った。知る喜びをみんなにもっと感じてほしい。これからのレインボープランは、小さな地域内での循環、それから大きな流通の循環に見える化していくのが大事だと思う。地域内循環は見えやすいが大きな循環は見えにくい。知りたがっている消費者に伝えなきゃいけない。ブラックボックスにできない。それが環境や経済に繋がっていくと思う。小さな循環だけでなく、みんなに見える大きいレインボープランを作っていく。多様なレインボープランを作っていければ良いと思う。多様な価値があることは SDGs でも大事なことで、都会の人にも知ってもらうのが大事。今みんなが知ろうとしているので、そういう知ることができる場をたくさん作っていくのが大事。

座長：長時間に渡り感謝申し上げる。

三浦先生からは、環境を守ることと経済を繋げていくことが非常に大事との話があった。今後、次のステップへ広げていく上でも、レインボープランの評価は大事になってくる。持続できるものへということで、SDGs に繋がるわけだが、今日は時間が短くあまり深くできなかったが、今後、提言書をまとめる上で、事務局の方にはぜひ SDGs の観点を踏まえてまとめていただけるようお願いしたい。経済、社会、環境に見える化すること。二つの視点でこれからも考えていきたい。

6. その他

今後のスケジュールの確認

6 月中旬～7 月中旬 第 3 回会議結果とりまとめ、提言書（案）作成

7 月下旬～8 月中旬 各委員より提言書（案）への意見出し

9 月中旬 第 4 回評価検討委員会 最終案の提示

10 月上旬 提言書提出